

田上 時子のエッセイ

「大相撲」土俵女人禁制

4月4日、大相撲春巡業が行われた舞鶴市で多々見良三市長が土俵で倒れ、救命女性たちに対し、行司が場内放送で土俵から下りるように指示。その報道を見た宝塚市中川智子市長が、2日後に予定されている宝塚巡業で土俵に上がって挨拶が出来ないことに疑問に感じ4月5日に日本相撲協会に申し入れをしたが、断られた。

当日、中川市長は土俵脇の立ち見台での挨拶の後、市役所内で会見し、再度日本相撲協会に申し入れると話した。

その直後、宝塚市役所には約500件の電話があり、うち400件は「相撲は神事、国技」「伝統だから女性は上がるべきでない」という意見ですべて匿名だったという。

6月2日、大相撲の女人禁制について、単なる是か非かでなく、考え、議論する機会にしようと市民らによる実行委員会が集会を主催した。

女人禁制擁護派の講師は急遽キャンセルになったが、中川市長が日本相撲協会とのやり取りの経過を報告。続いて、日本の女人禁制の歴史に詳しい講談師の旭堂南陵さんと大阪大大学院教授の牟田和恵さんが講演した。

会場で八角日本相撲協会理事長からの談話が紹介された。談話は女人禁制の理由に、第一に相撲はもともと神事を起源としていること、第二に大相撲の伝統文化を守りたいこと、第三に大相撲の土俵は力士にとっては男が上がる神聖な戦いの場、鍛錬の場であることの3つを挙げた。特に第三の「神聖な場、鍛錬の場」は、例えば

昭和53年5月に、当時の労働省の森山真弓婦人少年局長からの問い合わせがあったときも、その後も話題にあがる度に歴代の理事長が先人から教え込まれてきたとした女人禁制の理由とした。

だが疑問が残る。力士の鍛錬の場、戦いの場である土俵であるのは事実であろう。だが、鍛錬していない男性全般に拡大して、鍛錬している女性をも排除するのは解せない。また、鍛錬しているのは相撲力士だけではない。剣道はどうか、柔道はどうか。皆鍛錬し戦っているが、女性を排除してはいない。

旭堂南陵さんは、神事が起源だとされる相撲に、仏教や陰陽道の要素が入っていると説き、神事だと思い込んでいるだけだと述べた。

牟田和恵さんは、相撲の土俵なんて特殊な事例、女性の権利や平等にひろく関わる問題ではない、もっと大事なことがあると言う人がいるが、「大したことじゃない」の底に広がる大きな岩盤があることを指摘した。

日本国憲法には性の別なく差別してはならないとし、ジェンダー間の平等を明記しているが、日本の伝統がそれに反する考えを推奨しているということが起こっている。

さて、夏巡業の21か所の場所と日程が発表された。

うち2か所（天津市と仙台市）の市長は女性である。

どう議論が進むのか
進まないのか、見守りたい。

